

## 「関係学会合同企画／21世紀におけるマルクス／『資本論』150年記念シンポジウム」報告

執筆者名 水島 多喜男

### 1. 全体概要

2017年9月16日武蔵大学（東京・江古田キャンパス）において、経済理論学会、経済学史学会、社会思想史学会、基礎経済科学研究所、マルクス・エンゲルス研究者の会、唯物論研究協会、信用理論研究学会を実行委員会とするシンポジウムが開催された。

報告題目は以下の通りである。本稿後半では、これらのうち守 健二（マルクス・エンゲルス研究者の会、東北大学教授）による報告を紹介したい。

シンポジウム全体の第一部としては以下の概要の報告がなされた。

小幡 道昭（東京大学・名）：資本主義の発展と『資本論』の読まれ方

松井 暁（専修大学）：人間本質としての労働と『資本論』における「労働日の短縮」

内田 弘（専修大学・名）：比較近現代史から見た『資本論』

平子 友長（一橋大学・名）：『資本論』における物象化・物化・疎外—マルクス唯物論の基本概念

森岡 孝二（関西大学・名）：『資本論』から見た現代日本の労働時間

建部 正義（中央大学・名）：現代の金融危機と『資本論』

守 健二（東北大学）：“The First Publication of Economic Manuscripts in MEGA and New Aspects of Marx’ s Economic Theory”

Timm GRASSMANN (ベルリン大学博士課程・BBAW) “The MEGA and Marx’ s Studies on the Economic Crises of the 19th Century”

続く第二部では、総合討論／コーディネーター：八木紀一郎（京都大学・名）、ディスカッサント：鶴田 満彦（中央大学・名）& 竹永進（大東文化大学）による議論の総括、フロアからの質疑に対する報告者の応答、が行われた。

## 2. 守報告の概要<sup>1</sup>

アナリティカル・マルキシズムの立場から資本論草稿研究を行う守教授は先ず、①『資本論』第2巻用全8草稿のうち、エンゲルスは第3編（再生産論）の編集において第2草稿の半分を採用しなかった。②この不採用となった第2草稿部分において、マルクスは6部門による再生産表式を構想していた。③この6部門構想による検討の中心となったものは、物的均衡条件であり、各部門での賃金の還流であった、と指摘した。

その上で、6部門構想とそこで生じる理論的問題はスラッファ<sup>2</sup>に接近する内容であり、100年後にロウ<sup>3</sup>が取り組んだ経済理論上の重大な問題を先取りするものであったこと、そしてこのようなエンゲルスの編集は誤りであったと言わざるを得ないことを指摘した。

---

<sup>1</sup> フル・ペーパーは、Mori, Kenji(2017). “The First Publication of Economic Manuscripts in MEGA and New Aspects of Marx’ s Economic Theory: Marx’ s Six-Sector Model and Its Theoretical Implications.” *Tohoku Economics Research Group Discussion Paper*. No. 374. Graduate School of Economics and Management, Tohoku University. Sendai.

<sup>2</sup> Sraffa, Piero(1960). *Production of Commodities by Means of Commodities: Prelude to a Critique of Economic Theory*. Cambridge at the University Press.

<sup>3</sup> Lowe, Adolph(1976). *The Path of Economic Growth*. Cambridge University Press.

### 3. 守報告に関連して

草稿研究は、エンゲルスの編集によるバイアスから自由な、マルクス本来の思考をたどる試みとして続けられてきた<sup>4</sup>。草稿研究の成果は新MEGAの刊行、その日本語版の刊行という成果となっており、現在ではマルクスの論考を検討する際の必須文献となっている。

草稿は、旧ソ連・共産党中央委員会直属のマルクス＝レーニン主義研究所、旧東ドイツ・ドイツ社会主義統一党中央委員会直属のマルクス＝レーニン主義研究所、社会史国際研究所（アムステルダム：IISG）<sup>5</sup>、等に保管されていたが、旧社会主義政権は原稿を秘匿し自らの権威付けに利用したため、外国人研究者による草稿研究は困難を極めた<sup>6</sup>。原稿の「物神化」により科学的な検討を妨げた旧社会

---

<sup>4</sup> よく知られたように、『資本論』3巻のうち、マルクス自身により校正がなされたものは第1巻のみである。『資本論』には、校訂者の違いからエンゲルス版、カウツキー版、アドラッキー版等があり、ドイツ書店から刊行された現行『資本論』（通称ドイツ版）はエンゲルスによる編集が基になっている。マルクス以外による編集のバイアスを離れてマルクス自身の認識を探る動向の一つとして、草稿研究の国際プロジェクトの日本側の一人である大村 泉東北大名誉教授（当時助教授）がマルクス自身の指図書に基づくアメリカ版『資本論』の再構成を行っていたことを小稿の筆者は身近に見聞している。

<sup>5</sup> IISGについては「1935年創立、…オランダ王立科学アカデミーに属し…カール・マルクスとフリードリッヒ・エンゲルスの草稿があること、また1975年から刊行されていた新しい『マルクス／エンゲルス全集』の継続が、旧東欧諸国の解体後、座礁しかかるなか、編集方針を脱政党化し編集体制の学術化と国際化をはかって継承した『国際マルクス・エンゲルス財団』が置かれていることで日本では有名です。…スタッフによれば、2,000件を超える世界的な著名な思想家や研究者、組織・団体の文書集（アーカイヴ、アルヒーブ）を6km以上の厚さで所蔵し、マルクス／エンゲルス遺文庫はその二千分の一に過ぎない」。なお、書籍・雑誌・新聞等の印刷物が百数十万点保管されており、アジア関係では天安門事件前後の学生による民主化運動の文書類が関連研究では必見のものとしてされる他、複式簿記を説く16世紀イタリア語古書も有する〔橋本 直樹「研究紹介」『鹿児島大学 学報』No. 448, 鹿児島大学庶務部庶務課編, 1999年〕。小論の筆者もエジプト共和国への途上、門外漢であるにもかかわらず訪れることができ、橋本教授の案内でマルクスの手書き原稿の一部や日本の『平民新聞』が所蔵されているのを見聞できた。

<sup>6</sup> 新MEGA編集作業が旧社会主義圏の崩壊の中でかろうじて進められてきた点については、さしあたり竹永進『『資本論』の草稿研究の日本における最近の動向—新メガ第IV部問の編集作業との関連において—』を参照されたい。

主義国の罪は深い。小稿の筆者の知見でも、研究者が比較的容易に原稿にアクセスしえたのは社会史国際研究所（IISG）である。

このような困難に加え、マルクスの原稿自体も書き散らされた状態で存在するとともに、その独特の書体を判読するためには有る種の訓練が必要とされ、身近にいたエンゲルスが判読の任を負うことになった。さらに草稿におけるマルクス自身の数値計算には誤りが散見され<sup>7</sup>、草稿はその内容の確定からして多くの困難を伴うものであった。それ故、日本人研究者グループによる原稿の整理・編集作業は、日本人らしい粘り強さと緻密さのたまものである、と今回のシンポジウムでも評された<sup>8</sup>。

報告に対する質疑では、「6部門（の知見）が恐慌論とどのように係わるのか」という質問が出され、これに対し「（スラッフアの知見に迫るところにまで行きながら、その後のマルクス派の研究では、検討されずに終わってきたのは）もったいないということだ」との答えが返された。この問題意識の違いは、質問者と報告者が育った環境の学風の違いによるものと感じられ、個人的には興味深いものであった。

ただ、マルクス自身によって仕上げる時間が与えられていたなら、現行『資本論』の2巻、3巻部分はエンゲルスの編集による現行『資本論』とは異なり、さらに精緻化された姿を採っていたに違いない、と考える小稿の筆者にとっては、草稿内容をもってしても、マルク

---

[http://www.daito.ac.jp/research/laboratory/economics/publication/laboratory/file/economic\\_review2015\\_takenaga.pdf](http://www.daito.ac.jp/research/laboratory/economics/publication/laboratory/file/economic_review2015_takenaga.pdf)）。また、新メガ編集に係わる研究は我が国の科研費からも支援を得ることができ、国際的な草稿研究における日本グループの存在感を高めた〔課題番号 12430001 基盤（B）、同 14603001 基盤（C）、同 15203009 基盤（A）〕。

<sup>7</sup> 東北大学経済学研究科資本論研究会において田中菊次名誉教授は、多少の誇張を込めて、マルクス自身による数値計算には誤りが多く一切信用しない、と述べておられた。

<sup>8</sup> 尚、今回のシンポジウムでは、そのような原稿を2部門再生産表式にまとめたエンゲルスの編集能力もまた評価されるべきだ、とする指摘もあった。

ス自身の恐慌論は未完成であり、経済活動がどのようなプロセスを経て周期的変動を生み出すのかという点について依然として解明されていないことを知り得たことそれ自体が、大変有意義であった。そしてその後、このシンポジウムとは別の機会において、信用と再生産がどのようにモデル内で関連付けられるのか、という点も定式化されているとは未だ言いがたい状況が確認できた。再生産と恐慌と信用の間の連関をモデル化することの困難さは、現時点においてもマルクス派経済理論の発展を妨げる壁となっていると言わざるを得ないのである。